

# 西洋からみた土田麥僊 —スウェーデンの画家ニルス・ダルデルの作品を通して—

関西学院大学  
上田文

土田麥僊（1887-1936）は明治末から大正昭和にかけて新しい作品を次々に発表し注目を浴びた日本画家であるが、そうした作風展開は西洋美術に影響を受けていた。明治37年（1904）に竹内栖鳳に入門後は、西洋美術図書の模写を通して「春の歌」、「罰」（京都国立近代美術館）など現実感のある現代風俗を描いた。明治42年に京都市立絵画専門学校に入学、この頃から西洋世紀末芸術、「後期印象派」などに影響を受け、なかでもゴーギャンに倣って「海女」（京都国立近代美術館）を文展に出品し注目を集めた。その後おおきな振幅を見せ、日本の古画を研究して「散華」（大阪新美術館建設準備室）、「大原女」（山種美術館）を発表、日本画家としての地位を確立した。大正10年から12年（1921-1923）まで渡欧、帰国後「舞妓林泉図」（東京国立近代美術館）を発表し、明るい色彩による構成的な作風へと至った。麥僊作品の展開には段階を追った西洋美術の影響が明らかであり、これまで日本画家が西洋美術に学ぶという方向性を軸に研究がなされてきた。

本発表では、これまでとは逆に、西洋から見た麥僊の作品について考察してみたい。現在、麥僊の作品を収蔵しているのはギメ美術館（2点）、ボストン美術館（1点）などわずかであるが、麥僊の在世当時に注目すると、西洋で日本画が展示される機会が数度あったこと、麥僊の自選画集『麥僊畫集』がパリの画商の注意を引いたこと、同じくパリ滞在中に現地で制作した「ヴェトイユ風景」について批評を聞いたこと、などから1920年代初頭のパリでの麥僊の作品への評価がわずかながら判明する。しかし、ここでは、特殊な事例であるが、スウェーデンの画家ニルス・ダルデル（Nils Dardel, 1888-1943）が麥僊の「散華」に影響を受け、モチーフを借用した油彩画作品「バヤデールたち（Bajadärer）」（1918年）について検討したい。

ダルデルは、日本では全く知られないが、スウェーデンを代表する印象派以後の画家とされている。絵画制作以外にも活躍し、親しく交友したスウェーデンの富裕な貴族ロルフ・ドゥ・マレー（Rolf de Maré, 1888-1964）がバレエ・スエドワ（スウェーデン・バレエ団）を主宰していたときに（1920-1925）舞台装置のデザインを手がけている。「バヤデールたち」に用いられた「散華」のモチーフについて調査を進めると、ダルデルとドゥ・マレーは1917年に日本を訪れ、日本美術に強い興味を示していたことが判明した。ダルデルの制作を通して、印象派以後の画家にとって日本美術がどのように映っていたのか、なぜ麥僊の「散華」を取り上げたのかを考察し、改めて「散華」制作の過程を検討すると、栖鳳から麥僊に引き継がれた新しいねらいと方向性がこれまでとは異なる様相を帯びてくる。近代日本美術研究に西洋からの視点という新たな側面を加える試みとしたい。